



パネルディスカッション



モデレーター
木村 光伸（名古屋学院大学教授）

第1部

<<テーマ>>

「万博が地域に与えたインパクト」

<<パネリスト>>

長谷川 信義（愛知県副知事）
ヘルベルト・シュマルシュティーク
（ハノーバー上級市長）
アルフォンソ・セオアネ・ヤルザ
（セビリア市国際関係局局長補）
増岡 錦也（瀬戸市長）

（木村）

第1部は、「万博が地域に与えたインパクト」というテーマでお話をさせていただこうと考えております。先ほどの基調講演で、マリ クリスティーヌさんから、愛知万博の目指したものの、その実現のためにどんな努力とどんな苦労が、そして工夫が行われてきたのかということをお話いただきました。まさに環境配慮型、多様な参加型、そして未来実験型の博覧会が世界の大交流の中で行われ、そして2,200万人という大変多くの方々をお招きして、博覧会が今まさに成功裏に終わろうとしているところです。

マリさんのおっしゃった中に、博覧会というのはグレート・コミュニケーションなのだというお話がありました。まさにそのとおりだと思います。それをいかに私どもが実現してきたか、そしてこれからAVEのメンバーが、どのようにこれからの博覧会を発展させていくかを考える機会として、この第1部をまず「インパクト」という視点でお話をさせていただきたいと思っております。

さらに、先ほどピーター・ヴァン・ヴェセメルさんから、これは建築家の立場からだと思いますが、博覧会の持っている価値をどう測るのか、どういう評価をするのかということ、いろいろな角度から論じていただきました。明日のモダンな社会を作るという目標の中で、まさに博覧会は、社会における構造改革、その実験の舞台であるというお話だったと思います。私たちの愛知万博も、そういうことを目指してやってきたのだらうと思います。そのあたりも含めて、今日はいろいろな角度から議論をしていきたいと思っております。

まず、このパネルの第1部では、実際に博覧会を開催し、そしてそれを次の都市戦略とつなげてこられたセビリア市とハノーバー市のこれまでの経験、そしてそこから学ぶことのできたこと、あるいは万博開催都市としての成果を現在にどのように活かしてこられたのか。そういった視点でお話をいただいて、そのうえで愛知万博の当事者である愛知県、そして瀬戸市の市長さんから、実際に行われた取り組みについて議論をしていただきます。そして、万博開催都市のこれから進むべき方向性へと議論を深めてまいりたいと思っております。

まず、セビリア市のアルフォンソ・セオアネ・ヤルザさんにお話を伺いたしたいと思います。セビリア万博は、4000万人を超えるという大変大きな入場者を集めたメガ・イベントでした。そして、それがどのようにして実現されたのだらうかということも、私たちは大変興味深いのですが、今日はむしろセビリア市が1992年の万博で何を意図し、どのようなメリットを感じて事業を



お始めになったのか、お進めになったのかという点をお聞きしたいと思っております。

幾つか質問を用意しているわけですが、まず最初に、万博を契機とした地域づくりについて、博覧会を始めるに当たって、当初何を目指されたのかというあたりから、お話をさせていただきたいと思えます。セオアネさん、どうぞよろしくお願ひします。



(セオアネ・ヤルザ)

ご紹介ありがとうございます。皆さん、こんにちは。

まずは歴史的観点からお話しましょう。セビリア万博はスペインがEUに加盟した1992年に開催されました。その意味でスペイン全体に、さらなる開発の気運が高まっている時でした。国内政治にも変化がありました。社会党が初めて政権党となったのです。

スペインは現在、17の自治州に分かれています。アンダルシア州は最南端に位置し、セビリア市が州都です。そのセビリア市が1992年の万博開催都市になりました。1992年当時のアンダルシア州は、スペインの中でも発展途上の自治州でした。その頃誕生した社会党政権はある意味で、セビリア市、アンダルシア州など発展途上地域への新規投資の大義名分を探していました。それによって社会的な経済均衡を図り、EU加盟国として十分な開発を行いたいと考えていたわけです。

スペインの人口は4,000万人で、そのうちセビリアの人口は100万人なのですが、中央政府は、万博開催によって短期間で大

規模な投資を行うことができました。また、1992年というのは新大陸発見500周年に当たりました。それを記念する祝賀行事を執り行いたいとも考えました。

このように様々な事情が重なって、セビリアを中心に各種新規投資が盛んに行われました。こうした方針により他地域との経済均衡を図る努力がなされたわけです。当時のスペイン政府はアンダルシア州の発展促進に努めました。おかげさまで、現在ではアンダルシア州あるいはセビリア市は目覚ましい発展を、しかも実にバランスよく遂げることができたのです。

発展の目玉として挙げられるのが、鉄道と高速道路の整備が急速に進んだことです。ここで重視したいのは、アンダルシア州の住民のモチベーションが大いに高まり、自尊心を持ち、自分達の持つ力を再認識した点です。言い換えれば世界に向けて能力を披露し、自信を示せるようになったということです。

ご質問に対する答えとしては、まず万博開催によりアンダルシア州が他州と同じ経済水準を達成できたということ、そして住民の間に自尊心と自信が高まってきたということ挙げたいと思ひます。

(木村)

セビリアへ数年前におじゃまをしまして、1992年の博覧会の後を見にいったのですが、実はその前に1929年にも博覧会を開催しておられて、その二つの博覧会、どちらも大変大きな時代の変り目でした。1992年はまさにEUへの加盟もありますが、コロンブス500年という大きな節目であったわけです。1929年というのは、実はスペインがもう1回、イベロアメリカ世界の中で中心人物として浮上しなければならない、そういういわばアイデンティティの確立のときであったのだらうと思ひます。

そういう中で、今おっしゃいましたように、自尊心、これは夢と希望をどれぐらい地域に与えるかという話だったのだと思ひますが、そういうことを実現してこられたという意味で、大変素晴らしい博覧会だっ



たと思います。

ただ、その結果、いいこともいっぱいあったらうけれども、問題点も幾つかあったのではないかと思ったりもするのですが、その辺はいかがですか。何か問題点を抱えたりしたのでしょうか。

(セオアネ・ヤルザ)

最大の問題は、成功の犠牲になった人々が大勢いたことです。博覧会自体は大成功を収めました。目標来場者数は3,000万から3,500万人でしたが、最終的には4,000万人を集客しました。来場者が予想に比べて多かったため、受け入れ態勢が間に合わなかったり、来場者が1日で60万人を超える日もあって会場は混雑を極めました。

また、会場敷地面積は215ヘクタールでしたが、サービス体制の不備も時として見られました。私たちの予想を越える成功、想定以上の来場者が、問題をいくつか呈したといえます。

(木村)

成功ゆえとでもいうのでしょうか、そういうことがあったのだらうと思います。

そして、セビリア万博が終わって13年が経過しました。セビリア万博はその後「Cartuja'93」というプログラムで、跡地をどんどん整備をなさって、新しいテクノロジーを作ろうとなさっている。そういう意味で、あの万博がカルトゥー八島にもでしょうけれども、セビリア全体の地域に与えたインパクトとして、現在も継続しているもの、あるいはこれからも継続してきたいというものが、どういうものなのだろうかということをおたは知りたいのですが、どうぞ教えてください。

(セオアネ・ヤルザ)

私自身はその点について考えてはいなかったのですが、マイナス点についてもう少しお話ししましょう。愛知万博の場合は当てはまらないかもしれませんが、スペインでは博覧会委員会の立ち上げ時には否定的な反応もありました。愛知県は経済的に非常

に発展した地域です。しかし、ある地域に対して博覧会のために新規で大規模な投資がなされたり、今まで企業がなかったところに新しい企業が進出したり、あるいは各種の経済的支援が急激に行われたりすると、万博終了後に少なからずマイナス結果をもたらすことがあるということです。

まず万博終了直後の2、3ヵ月というごく短期間を考えてみます。セビリアの場合は93年から94年にあたりますが、地域経済は万博効果を吸収しきれませんでした。投資をくまなく吸収し、消化するのに非常に時間がかかったといえます。

ですから、博覧会の経済効果を受け入れる態勢を整える必要があると思います。日本の場合は、そうした経済効果を吸収するだけの準備ができていないかもしれません。しかしもし準備が整っていない都市・地域で、万博開催による経済効果が急激に現れた場合、投資や経済効果、経済的支援をきちんと消化するのが難しくなります。民間セクターが投資を吸収し、それを原動力として活用して経済発展へとつながるわけですが、セビリアの場合、そうした流れに乗るのに大変な時間がかかってしまいました。

私が言うことではないかもしれませんが、セビリア万博自体は、10点満点で9点をつけてよいと思います。しかし93~94年の段階では、せつかくの経済効果をうまく消化できなかったため、その点ではマイナス点をつけねばなりません。

万博跡地の利用方法について検討するために、万博終了前に、「Cartuja'93」という公社が設立されました。この公社を通じて万博終了後跡地をどのように活用していくか、議論を行いました。その結果、テクノロジー・パーク(工業・科学技術団地)に転換しようという結論に達しました。現在では、そのテクノロジー・パークに進出している企業は250社にのぼり、1万人規模の新規雇用が創出されました。市全域に経済的な相乗効果が上がっています。

こうした点から、当市の経済状況は非常に堅調であるといえます。ただ93~94年段



階においては、大型投資があつたにもかかわらず、それを吸収するのに余りにも時間がかかってしまいました。ですから、将来開催される博覧会では、そこから生じる様々な経済効果を早く吸収できるような体制を整えていただきたいと思います。

(木村)

これから考えなければいけない重要な問題だと思えますが、最近の日本語のはやり言葉に、「燃え尽き症候群」というものがあります。「一生懸命頑張った」「頑張ってたね」という後の虚脱感で、次のステップに乗り遅れてしまうということが、どうしても起こりがちだと思います。それを、セビリアは実は体験されて、そしてそこから立ち上がって、今また「Cartuja'93」で大変大きな発展を遂げつつある。私は、博覧会というのは、このように息の長いステップでもってものを考えないと、地域開発とはつながらないのだと考えています。そういう意味で、セビリアは、私にとってはとてもいいモデルだなと考えているところです。どうもありがとうございました。

続きまして、2000年に万博を開催されましたハノーバー市のようなすをお話したいと思えます。ハノーバー万博は、皆さんご承知のように、幾つもの意味において、万博の歴史の転換点であったのではないかとされています。私たちのように、地球に住む者が共有する環境というものをテーマにして、そういうテーマのもとに博覧会が行われた。これからの人間の新しい生き方に迫った博覧会として、あるいは20世紀型から21世紀型への世界観の、大きな転換を象徴する博覧会だったと。そういう意味で歴史に残るものではなかったかと思えます。

ハノーバー万博にも、成功だ、失敗だといろいろな評価がついて回っていますが、そのハノーバー万博の基本的なコンセプトを教えていただきながら、あの万博の意義と、それからあの万博がハノーバー地域へ与えたインパクトについて、お話を頂きた

いと思えます。

それでは、ハノーバー市長のヘルベルト・シュマルシュティークさん、どうぞお願いいたします。



(シュマルシュティーク)

ご紹介ありがとうございます。ドイツで博覧会を開催するという考えがとりざたされ始めたのは1980年代後半でした。構想は「ドイツ・メッセAG」という会社が考えたものです。ドイツ・メッセ社はハノーバー市とニーダーザクセン州によって作られた会社です。敷地面積100万㎡におよぶ見本市会場はその当時、改修と近代化が求められていました。ですから、万国博覧会を誘致することは、21世紀に対応できる見本市会場や展示ホールに生まれ変わらせるチャンスでもありました。インフラも未来に向けて整備する必要がありました。そういうわけで、ハノーバーは既存の会場を利用して万博に着手することができたのです。

博覧会会場の60%は見本市用の敷地でした。ハノーバーにおいては、新規開発の必要があったのは残り40%だけでした。これが、既存のインフラで万博に利用できるということを示す最初のステップでした。このような持続可能な博覧会という考えは、既存の見本市会場の活用だけにとどまらなかった。ハノーバーとその近郊地域は、万博のおかげで交通インフラをよりよい形に整備することができました。ドイツ市民の足として欠くことのできない公共交通機関のみならず、ハノーバーを横断する見本市会場交通システムにおいても、単に近郊



地域間を結ぶ道路としてだけでなく、より高度な交通網として整備されました。1990年にドイツが統一された後は、ハノーバーへの交通が、そして東西ヨーロッパの垣根が取り払われた後はハノーバーを横断する交通、中でも東へ向かう交通網の刷新が非常に重要となり、2000年ハノーバー万博は、この計画の実現を早めるチャンスとなりました。

もう一つの目的は、住宅需要に対応できるだけの住宅建設の促進でした。住宅建設を進める一方で、環境に配慮しつつエネルギーや水をより上手に活用する方法を見出すチャンスとなりました。ハノーバー地域が有するノウハウはもちろん、当地域だけにとどまることなく、ドイツ国外へも必然的に広がっていきました。大型見本市の開催地としてだけでなく、ハノーバーは世界的知名度を高める必要がありました。そのねらいのひとつが、地域住民の参加でした。

博覧会の諸施設は持続可能であるべきもので、万博終了後利用できない建物はむやみに建てずに、例えば特殊な紙で作られた日本館のように再利用できるような建物にすることも目指しました。ハノーバーは最大限の再利用を目指しました。そのため、新しい建設エリアとして、万博会場の東部を利用していく構想もありました。

また、ハノーバーには、地球の未来という課題を議論する国際会議を開催する意図がありました。全世界の人々のよりよい生活のための、ワールドワイド・プロジェクトの構想も持っていました。

(木村)

非常に多方面から万博を戦略的にお考えになったということがよく分かります。ハノーバーでは、そういうハードの整備とともに、もう一つ大事なことがあった。それは、住民参加とかワールドワイド・プロジェクトのように、ハードを補完する、要するに、人間が何かうごめけばいいというものではなく、ハードがきちりと整備されている中で、ハードを補完する市民活動の仕組みを一生懸命考えられたと、私たちは

理解をしているわけです。それが実は、今回の愛知万博に大きな影響を与えましたし、これからの万博を考えるうえで、最も重要な課題であるのかもしれないという気がしています。

そこで、もう一つハノーバー市長にお伺いしたいのですが、「地域づくり」という、非常に漠然としたものの言い方をしますけれども、地域づくりの全体的なポリシー(政策)の中で、万博をこのように活用するのだと、こういう意義でもって万博を利用するのだ、そのことで、私たちの地域をよりよくするのだというようなことが、ハノーバーではどのように考えられて実行されたのでしょうか。

(シュマルシュティーク)

2000年のハノーバー万博は、世界の国々が一堂に会した平和の祭典でした。当地域のインフラ一新という目的も達成しました。現在、ハノーバーの交通インフラは、ヨーロッパでもひととき優れています。極めて短時間で移動が可能な地域として、ハノーバーほど素晴らしいところはありません。ハノーバーは南北を繋ぐ位置にあり、東西ヨーロッパを結ぶ高速道路や鉄道といった交通網は、今後20年間の著しい交通量の増加にも十分対応できるようになっています。

ハノーバーの人口は近郊住民を含め約100万人ですが、博覧会のような国際的な催事をしっかりと受け入れる姿勢がありました。外国の来訪者と長い間、個人的に連絡を取っている住民も沢山います。過去に開催されたこのような国際規模の見本市を通じて、ハノーバーの人々は、自分たちが国際社会に対し柔軟かつ寛大であると自覚しています。

ハノーバー市の中心部において博覧会以前から民間セクターが進めている近代化は、万博終了後も継続されています。万博会場付近にある、持続可能な環境保護を目指した新しい宅地は、若い世帯を対象としています。ハノーバーの住宅市場にアパート3800戸分の新築物件が追加されました。



万博以降は、観光も促進しました。ハノーバーおよび近郊の宿泊施設の収容能力は拡大しています。また観光客も毎年 4~8%の割合で増加しています。

さて、今後は何が改善できるでしょうか。ハノーバーは出版メディアにおいて国際的な知名度を上げてきてはいますが、まだ十分とはいえません。また博覧会というものは、オリンピックと違い、毎回様相が大いに異なり、事前に予測がつきません。したがって、開催に先立って万博とは何なのかという情報を発信し、世界の人々の理解を十分に得ることが必要です。

ハノーバー地域以外の人々の話題といえは、国際的なつながりを築くチャンスや、国を代表して自国文化を紹介するということよりも、万博にかかわる費用のことが中心になっていました。将来の博覧会では国際社会を形成することの価値や、互いの文化を紹介し合うことによって得られる恩恵を明らかにすることにもっと目を向けるべきでしょう。博覧会には、開催終了後の利用を考慮した恒久的なパビリオンという考えがあります。他方では会期中だけの一時的なパビリオンという考えもあります。出展国すべてに、この持続可能エリアについての共通理念を浸透させることは難しく、ハノーバーの見本市会場では理念の具現化に困難を伴いました。

博覧会という思想には未来があります。ハノーバー万博は、このインターネット時代においてさえ、世界各地の多種多様な文化を理解するためには人と人との直接的なふれあいが必要であることを証明しました。たとえ民族対立が激しい時代であったとしても、世界中の人々が集い「世界はひとつ」ということを共に祝福することができるのです。

2000年ハノーバー万博で構築されたワールドワイド・プロジェクトは、未来への可能性です。興味深いプロジェクトを持つ世界各地の万博開催地を繋いで、継続的で互いの経験から学ぶネットワークを構築することが、今後の博覧会の重要性のひとつであり、博覧会に本腰を入れて取り組む地域

社会を形成していくことにつながります。

ハノーバー万博の会期中には、グローバル・ダイアログが実施されました。これは特にNGOが、地球規模での持続可能で平和なグローバル・ビレッジの必要性について議論しあうフォーラムでした。このフォーラムは今後の博覧会にも継承されるべきでしょう。

(木村)

万博と万博をつないでいく仕組みを、ワールドワイド・プロジェクトを中心にたくさん構築して下さった。それから、市民参加の形をたくさん見せて下さったのが、ハノーバー万博だったのだと思います。きっといずれまた形を変えて、ハノーバーがもう1回万博にチャレンジして下さるときがあるのだと思いますが、そのときを期待したいと思います。どうもありがとうございました。

では、次に、いよいよ地元愛知万博の開催地の問題にまいりたいと思います。セビリアもハノーバーも、それぞれの地域、都市の特殊性や特徴を十分に活用しながら、万博を通して次のまちづくりのステップを確実に進められていらっしゃることを実感しました。

もうすでに明らかになりつつありますように、博覧会というのは単なる一過性のイベントなのだと言う人がいますが、そんなものではなく、地域形成、地域づくりの持続的な、継続的な方向性を指し示すものであり、そういう大きな知恵のメッセージそのものなのだとは私は思っています。ひょっとすると、これがもう今日の結論なのかもしれないませんが、それでは、この問題を愛知万博ではどうとらえてきたのか、愛知万博は1988年ごろから、いろいろな紆余曲折の結果、今日に至ったわけですが、そのあたりを開催主体の愛知県と会場所在地の一つである瀬戸市からご報告を頂きたいと思えます。

まず、瀬戸市の増岡錦也市長にお尋ねしたいと思います。開催決定から会場の確定内容の詰めまで、多くの議論があり、瀬戸



から見たら、だんだん博覧会が遠ざかったかなというような印象があったのかもしれませんが。しかしながら、前進し、ようやく開催にこぎつけました。そして、その間のご苦労は大変なものだったと思いますが、それだけに、この会期中のにぎわいを喜んで、いろいろな考えをお持ちだと思います。そこで、もう一度原点に立ち返ってお尋ねするのですが、万博の開催ということに対して、瀬戸市はそもそも何を期待しておられたのでしょうか。そこからお願いします。



(増岡)

よろしく申し上げます。まずもって思い出すのは、1997年、今から8年前ですが、国際博覧会の誘致が決定したときの市民の大きな感動の瞬間です。当時は、市民・行政・企業ともに、地域の新しい目標を見据え、瀬戸市のよさを再発見し、歴史を踏まえた新しいまちづくりを目指すという意欲に燃えていました。その元気を、博覧会がもたらしてくれるものと感じたわけです。

瀬戸市としては、博覧会の開催効果を地域発展、市民本位のまちづくりのきっかけとして、国内外の知名度の向上による来訪者誘致の拡大や、国際交流活動強化につな

げ、やきものを中心のイメージに据えた新しい文化都市への転換を図ろうと決意をしておりました。博覧会の開催がその起爆剤となることを、大いに期待していたものです。

しかしながら、その後、オオタカの巣に象徴される環境配慮型という時代の要請が、会場予定地の変更をもたらしました。私たちの当初の期待を、十二分に満足する事を困難にしました。それでもなお、瀬戸市はこの博覧会を通して大きく変貌を遂げました。

一つには、中心市街地における再開発。それに伴い、市民・訪問者の拠点ができた事です。博覧会を迎えるに当たり、「瀬戸蔵」「パルティセト」といった二つの施設を整備し、瀬戸川沿いの道路と景観の整備を行い、玄関口にふさわしい広がりゆとりのある歩道を整備してきました。

また、景德鎮市、リモージュ市、ナブール市といった海外の友好都市との連携強化と、やきものを通じた交流の実施、来訪者に対するもてなしのボランティア組織やホームステイ・プログラム、「瀬戸の家」などを通して、市民が主体的に国際交流、来訪者もてなしの気運が高まってきたことは、瀬戸市の今後に変りある展望になっていると考えています。

一過性のにぎわいを瀬戸発展の起爆剤にしたいと考えていた当初よりも、会場問題が落ち着いた後のほうが、長期的な展望に立ったまちづくりと、ボランティアや博覧会市民参加といった市民主体の活動を、地道ではありますが、持続的な展望を持って進められるようになったような気がします。

このように、市民・行政・企業ともに意識を変えて、21世紀に生きる瀬戸市を創造しようという意欲が盛り上がってきた事は、瀬戸市にとって、博覧会開催の最大の効果ではなかったかと思っています。そして、これを継承していく事が重要になっています。その意味において、振り返れば、15年に及ぶ準備期間は決して無駄ではなかったと考えています。

(木村)



ありがとうございます。当初はどうやら博覧会がやっていることを、何かもらえるのではないかと、町に何かいいことがあるのではないかとというようなイメージでとらえることから始まったのだらうと思います。しかし、そうではなく、だんだんと博覧会のために、町は何ができるのか、そのことによって町がどう変わるか。自分たちの問題として、瀬戸は真っ正面からとらえられたのだと思います。そういう意味では、博覧会が少し形を変えたことが、決して瀬戸にとってマイナスではなかったのかもしれないと思います。

では、そのような地域の変化を受けて、万博を契機としたこれからの地域づくりとして、瀬戸市はこれから、何を目指しているのでしょうか。

(増岡)

今話したように、ハード・ソフトの面で瀬戸市は大きく変わったと自己評価をしています。その中で、瀬戸市の知名度が格段に上がったことが最大の変化の一つと考えています。瀬戸市は「せともの瀬戸」として知られてはいますが、日本にはほかに「瀬戸」という地名が少なくありません。今回の博覧会によって、「万博開催都市瀬戸」という名前を国内外にアピールできたことは、今後の瀬戸市にとって有形・無形の財産になると思っています。

また、今回の博覧会が瀬戸市で開かれたことを象徴し、さらに博覧会の記念建造物として、直径30mの陶製のやきものモニュメントを製作できました。瀬戸市の産業文化のみならず、愛知のものづくりを象徴するものとして、単なる記念物以上の効果をもたらしてくれるものと考えています。

これから大きく着実に変ぼうしていくであろうこの地域を見守る記念物として、さらにやきものモニュメントを維持・管理し、今後の瀬戸市とやきもの文化を考える出発点にしたい、このような希望を持っています。

また、開催地となったことにより、多くの市民が、ボランティア参加や催事出演、

来訪者の歓迎など、さまざまな局面で世界の人々が集う国際博覧会にかかわれたという自信は、市民にとって大きな財産でしょう。今後瀬戸市の発展の原動力になっていくものと確信しています。

さらに、瀬戸市では、博覧会開催を記念し、同時にそれを盛り上げる独自のイベントとして、「せと・やきもの世界大交流イベント」を実施しました。この独自のイベント活動を通して、これまでにない大規模な市民参加を得ることができ、友好姉妹都市などからの訪問団や、各国パビリオンのスタッフ等との多様な交流により、市民の国際感覚も大いに磨かれてきました。これは瀬戸市民の誇りであり、財産でもあります。博覧会終了後も地道な活動を続けていくことにより、この博覧会を通して得た、瀬戸市と瀬戸市民の新たな感性や行動力をまちづくりの原動力として、歴史を踏まえ、かつ新しい感覚に満ちた瀬戸市を作り続けたいと考えているところです。

(木村)

ありがとうございます。瀬戸は本当に変わりました。町並みも変わりましたが、人が変わったと思います。瀬戸の町を歩いていて、非常ににこやかに「いらっしゃい」「こんにちは」というお声がたくさん聞けるようになりました。人もたくさん変わりました。

何よりも変わったのは、僕はこう思うのです。行政と市民が一緒になってやれば何かできるという自信を持った。先ほど、セビリアでも自尊心とか自信という話が出てきました。市民が自信を持つと、そのことによって町は変わるのだという実感を、博覧会は私たちに与えてくれたのではないかと思います。

そういうことを考えて、これからの地域づくりで、もう少しやりたいなということがあったら、市長、どうぞ教えてください。

(増岡)

今回の博覧会の経過を考えると、会場予定地のたび重なる変更という事実を大



変重く受け止めなければなりません。従来開催された博覧会は、その会場自体が都市再生の課題を担った場所であり、博覧会の建設的・土木的、あるいは計画的な実験がそのまま、新しいまちづくりへと継承されていくことが可能でした。それは、ハード中心の、あるいは政策的な意味で、上からのまちづくりであったのではないかと思います。そして、市民は純粋にお客さんであったのではないかと思います。

今回の博覧会では、会場はおおむね元の状態に復されることになっており、目の前にある状況を見る限りでは、少数の記念物になるものを除いて、博覧会の成果は何も残らないということさえ、あり得ます。博覧会の催事の評価であれば、一過性のそれでよいかもしれません。しかし、本日この会議が象徴的に示すように、博覧会は地域の次の時代を形成する巨大な実験場であり、そこで今回のようなたくさんの技術、生活観、自然環境とのかかわりかたといった、ソフトを次に伝える21世紀型の博覧会においては、その成果を明確にし、それから地域が何を継承し、何を新たに創造するかという構想と、具体的な計画、そのためのタイムテーブルを確実に構築していかなければならないと思います。

特に博覧会で得たソフトの遺産を活用した、これからの地域づくりが求められることは明白であると思います。瀬戸市が重点的に目指すのは、せともの瀬戸という地域の独自性と歴史を再認識するうえで、伝統工芸に支えられた地場産業であり、最先端の技術に支えられたセラミック産業として、未来の持続型環境社会に貢献するであろう陶磁器産業と、それを中核とした新たな産業都市を建設することです。古い歴史から新しい時代を見据える、新地域の建設ということです。元気あふれる地域産業は、同時に有望な観光資源となります。国際博覧会で世界の舞台に立った瀬戸市を、観光産業都市、国内外の交流を通して発展できる都市として、博覧会のボランティア活動を通して見せた市民の力をもとに、市民が自ら学び、進んでいける雰囲気満ちた都

市としていきたいと思っています。

瀬戸は、この地域における国際博覧会実現への努力とともに、これまで「せと・まるっとミュージアム」の構想を着実に進めてまいりました。瀬戸市域全体に点在する歴史遺産、産業観光拠点、町かどに建った資料館や博物館、体験型施設などをつないで、瀬戸市全体を一つの大きなフィールド・ミュージアムとなるように考えています。

すでに多くのプログラムを実施してきましたが、その中でたくさんの市民がボランティア・ガイドとして参加し、町の活性化に貢献した経緯もあります。この構想に博覧会で得たソフトを活用し、さらに発展させることが重要な使命と考えています。

また、今回の博覧会で、私たちが日ごろ見過ごしがちであった身近な自然や里山の大切さにスポットが当てられました。瀬戸市は緑に覆われた町として歴史を刻んできました。これから自然の叡智を瀬戸市民の知恵が支え、環境の保全と産業の活性化が両立できる町を目指すものです。自然を守ることや自然を復元することが、市民の生活向上につながるように、互いの知恵を出し合っていきたいと思っています。

博覧会を契機として模索されることになった、自然と人間が融和的に暮らす地域づくりの可能性、この経験を、瀬戸市は「環境」「文化」「国際」のキーワードに支えられた、新たな産業都市建設のために、大いに活用していきたいと考えています。

愛・地球博、瀬戸市が21世紀最初の国際博覧会を構成する一員として貢献できたことを大いに喜び、21世紀にふさわしい新しい産業構造と、持続的に地球と地域を守る自然観をともに創造していくという偉大な役目を果たすために、これからも努力を傾注することを申し上げ、わが瀬戸市の報告といたします。ありがとうございました。

(木村)

瀬戸市長、どうもありがとうございました。瀬戸市は博覧会からいろいろなものを学びました。そして、それを次のステップ



として、次の世代に伝えていく、あるいは地域そのものを変える大きな原動力にしたということなのだろうと思います。

今回の愛知万博は、瀬戸・長久手・豊田という地域の市町が頑張っ、博覧会を盛り立てていったわけですが、実際には、愛知県という、もう一回り大きな自治体が開催主体となって事業が進められてきました。そこで言うと、この「地域」という概念は大変広い。先ほどの「瀬戸」という概念と比べても格段に広いわけです。また、愛知県は日本を代表するものづくり県ですから、経済規模も巨大であるわけです。その県が国際博の開催に取り組んだということの意味を、ここでもう一度明確にしておく必要があるだろうと思います。今日はパネリストとして、長谷川信義副知事にご登壇いただいております。非常にご苦勞があったと思います。さまざまな苦勞の末に実現した愛知万博と、愛知県を中心としたこの地域のこれからの在り方をめぐる諸計画、これまでの苦勞とこれからの問題、併せてご発言を願いたいと思います。

まず初めに、万博を契機として具体的に取り組んだ地域づくりとは一体どういうものだったのでしょうか。次に、博覧会を契機として愛知県はどのように変わることを期待しておられるのでしょうか。大変包括的な質問ですが、いよいよ会期末を迎え、次のステップのかじ取り役としての長谷川副知事に、お考えをお聞きできればと思います。どうぞよろしくお願ひします。



(長谷川)

構想以来、ちょうど 17 年がたちまして、

その間、実に多くの方が博覧会にかかわりを持たれました。私もその一員として常に思っていたのは、愛知万博は、ややもすると大型の地方博と誤解されやすい、規模が大きいことに意味があるような、地方博の大規模なものだと誤解を受けるのではないかということです。まず、県民にその違いをよく説明する必要があったわけです。

そうなりますと、この国際博覧会の持つその存在価値というか、役割というものが何であるかが問題であります。私はずっとかねてからこの問題について先輩諸氏の教えを受けて自問自答をしてきましたが、三つの切り口で考えるべきだと思っています。

一つ目は、国際博覧会は、国際条約に基づく世界最大のイベントであるということです。オリンピックといえども、条約ではないわけです。国際博覧会は条約に基づく国際的事業であるということです。

二つ目は、その主催は、開催国政府が責任を持って開催するということです。国家が行う事業であるということです。

三つ目は、それを引き受ける地元にとっては、これは将来の地域を左右するほどのリスクも伴った大きなプロジェクトであるということです。この三つが切り口として考えられると思っています。

なぜ万博が 150 年もったかということから言えば、この三つの切り口が、時により、国により、うまくバランスを取って開催されてきたからです。なかには、ややもすると国威発揚の博覧会といわれたものもあったかもしれませんが。あるいは、地域の経済開発優先といわれた博覧会もあったかもしれませんが。ですが、その時々、国家の事情に応じてうまくバランスを取って博覧会を開催・運営してきた。それが国際的に賛同を得てきたからこそ、150 年の歴史があったと思うわけです。

そういう博覧会を、ちょうど我々のだれも気づかなかった経済バブルの最盛期に、次の時代の政策目標として、当時の各界のトップが掲げられたわけです。すでにそのとき、来るべき 21 世紀の初頭に向けて、つまり十数年先を見据えて、引き続きこの地



域がどう活力のある地域であり続けることができるか、弾込め（たまごめ）をする必要があるという議論がされたのでした。

そこで、21世紀に向かって新たな地域構築をするための一つの候補として、国際博覧会が浮上したわけです。ご案内のように、国際博覧会は、産業経済あるいは文化芸術、さらには国際交流・教育・人材育成など、多方面・多機能なものを持っているわけです。今から振り返れば、これにあえてチャレンジし、この諸課題をあえて乗り越えて消化し、この地域の将来の血肉にしたいというのが、当時のトップリーダー達の熱い思いではなかったのかと思うわけです。

その時の背景としては、21世紀は今以上に、つまり20世紀後半よりも比較にならないほど国際化が進むという読みが底辺にあったわけです。したがってこの地域が取り残されないようにするには、一層の国際交流の時代、その時代の到来に備えて手遅れのないような準備をしておく必要があるというのが、当時の基本的な発想であったわけです。したがって、博覧会の準備を、ソフト面から言えば、やはり国際化時代にふさわしい、国際的に通用する地域づくり、そして何と言ってもこの愛知の名を、良い印象を持って世界中の方々に知っていただくことがソフト面の努力でした。

ハード面で言えば、たくさんのお客さんを迎える準備をするインフラは、万博の開催のためだけのプランであってはならないということでした。当時すでに長期的な地域整備構想もいろいろありましたが、鉄道にしても、道路にしても、新空港にしても、これは万博を誘致するためにプランしたものではありません。それを見越してすでに計画をされていたものが、ありがたいことに万博を契機にPlanからDoに加速をしたわけです。その準備をすることが、この地域として、国際的あるいは国内的にも貢献すべき準備であると考えて、十数年が費やされたのだと思っております。

この博覧会の開催を契機として、愛知の地域づくりをどう変えるか、どう進めるかということですが、先ほど申し上げた、人・

物・情報の一層の交流の時代にふさわしい地域づくりがその1点目です。

2点目には、先ほど知事の冒頭のあいさつにもありましたが、やはり環境立県にこだわりたいということです。愛知万博の変遷の十数年は、オーバーに言えば、我が国の自然環境政策の変わり目のテストケースとして、その時々、舞台上、舞台上に乗ってきたものだと思っております。

特に、1995年の生物多様性国家戦略の閣議了解、あるいは生物多様性条約の批准を境に、我が国の自然環境政策は大いに変わりました。その真っ只中に、瀬戸の海上（かいしょ）地区の博覧会会場の是非論が行われたのが端緒です。その後、希少種が出てきたということもあり、会場変更になったわけですが、我々はその間、自然環境について日本一、世界一勉強したのではないかと考えているわけです。したがって、それだけに、我々はこれからの地域づくりは、より一層、環境に配慮した地域づくりにこだわりたい。これが2点目です。

3点目は、愛知万博では、市民参加型の博覧会を見事に構築し、実施したことです。今日現在も、大勢のお客様を大勢のボランティアがもてなしておられます。現に今も市民参加によるボランティア活動が会場の内外で展開されていますが、このエネルギーが9月25日で終わっては何もならないわけですので、我々はこのパワー、このシステムを、次の地域づくり、あるいは県政の運営に少しでも役立てないと、博覧会の効果として正当な評価はしていただけないのではないかと考えております。これが3点目です。

4点目、これは今、木村先生もおっしゃいましたが、燃え尽き症候群といいますが、ややもすると、万博やオリンピックのような歴史的に見ると瞬間的であるこういう大きな事業は、終わった後、どうしても地域がパワーダウンすることが恐れられるわけです。おかげさまで、愛知は先人の知恵もありまして、長い間、日本一元気な地域として頑張ってきたわけですが、この博覧会でエネルギーを使いきって、貯金を使い果



たしたのでは申し訳ないので、さらなるこの地域のパワーアップのためには、とりあえずはやはり引き続き、産業の活性化に取り組むべきだろうと思います。

この産業活性化のためには、新しい産業を創造する、例えば健康とか長寿といった新しいテーマの産業創造にチャレンジしていきたいと考えております。それが5年、10年たったあと、愛知万博の成果としてじわりじわりと効いてくると思っております。これは博覧会会場の一点集中ではなく、この地域全体からそういうものがわき出てくるものなのです。

ある万博の権威が、博覧会が成功したかどうかは、10年後、その地域から文化が発信されるかどうかで決まるのだとおっしゃったことがあります。そういう点で、9月25日以降、すぐにお土産は見当たりませんが、そこは一つ辛抱していただいて、5年、10年、15年で、みんなで次なる愛知の地域づくりに努力をしていただければありがたいと思っております。

(木村)

ありがとうございます。大変心強い、いわば決意表明をしていただいたと思います。一つは、これからの産業振興、新しい産業創造をやらなければいけない、それがこの地域の使命であるということと、その一方で、環境立県で環境配慮型のことをきちんとやらなければいけない。この二つを両立させるのだと、いろいろなところで今こういうことが言われています。その言葉の基として、サステナビリティ、つまり持続可能性という話がいっぱい出てくるのです。

さあ、本当に私たちが求めているサステナビリティとは何なのだ、どこにあるのだと。石油のある限りのサステナビリティ、そんなものはだめですね。現在の価値観でもって私たちが生き続ける限りのサステナビリティ、これも困ると思うのです。新しいものを、産業振興と環境立県と、そして住民が本当に参加した形で地域づくりをやっていくということを、これから長く続けていく。そういうスタートとして、この愛

知万博の成果が私たちに残されていったのだと我々が威張って言えるように、これからも私たちも頑張っていきたいと思います。3年後にサラゴサへ行って、「市長さん、こんなふうに愛知県は変わったよ」と多分言います。言えなかったらごめんなさいですが、そういうことを言えるようなまちづくり、地域づくりをやっていきたいと思っております。

そこで、先輩たちに聞きたいと思うのですが、今まで本当にそういうことを考えながら苦労をなさってきたセビアのセオアネさん、この愛知万博について少しコメントを頂ければありがたいですが、どうぞよろしくお願いします。

(セオアネ・ヤルザ)

私は、愛知万博を2度見学しました。いずれも本当に印象的でした。大規模な開発と会場の様々な展示がバランスよく巧みに配されており、また、環境ともうまく調和がとれています。それどころか愛知万博では、前例のない優れた特徴がそこ彼処に見られ、すばらしい万博だったと高く評価しています。

スペインでは「大きな象が小さな店に入ってしまう」という表現があります。それと同じことがこの万博会場にも当てはまります。あのようなすばらしい自然が壊されることなく、会場に巧く収められているのです。会場は自然に満ち溢れています。そのような環境の中で万博が開催されたことはすばらしいことです。

また3年後に、皆様のコメントをお聞かせいただくのをとても楽しみにしています。どうすれば自然環境を万博に組み入れることができるか、愛知万博は様々なアイデアを实践してそれを成し遂げました。100を超えるパビリオンの出展があったこともすばらしいことだと思いました。

(木村)

では、最後にもう一つ、今度はハノーバーで大変難しい博覧会をきちっとおやりに



なって、そしてそのことを契機に、この5年間どんどん変わってきたというハノーバー全体を見通しておられる。そういう立場から、ヘルベルト・シュマルシュティークさんに少しコメントを頂いて、このセッションを終わりたいと思います。どうぞお願いします。

(シュマルシュティーク)

おっしゃるとおり、ハノーバーは大きく変わりました。そして愛知万博に関するコメントとしては、主催者は実に素晴らしい仕事をされており、また同時に、万博の考え方がこの愛知でも十分に活かされていたと感じました。愛知県をはじめ長久手町、瀬戸市、豊田市の皆様は、大いに誇ってよいと思います。皆様も、万博の考え方が継承されていることがよくお分かりになったでしょうし、サラゴサや上海など今後の開催地も、多くのことを愛知万博から学ばれたことでしょう。そして万博開催によって資源を開催地域に集中的に投入できるといった意味でも、日本にとって、とりわけ愛知県にとっては非常に素晴らしい成果が上がったと感じています。

(木村)

ありがとうございました。とりあえず何かいっぱい褒めてもらったような気がします。褒めてもらって喜んでいるだけではだめなので、これを次のステップに、そして私たちの成果を、サラゴサや上海に伝えていかなければいけない。そういう使命を持って、この地域で頑張っていきたいと思っています。

第1部はこの辺で終了しまして、第2部では、これを支えた市民は一体どうしたのか、何をやってきたのかというお話に移らせていただくということで、第1部はここでいったん締めさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。登壇の先生方、ありがとうございました。